



美術史学会・シンポジウム

有朋自遠方来

5月11日、12日、13日の3日間、大和文華館で第26回美術史学会全国大会が開催されました。美術史学会には、日本における美術史研究者のほとんど全部が入会しており、会員のなかには外国の東洋美術学者もふくまれています。

学会には3日間で163人の参加者があり、近來にない盛況でした。会はず11日午前の総会からはじまり、同日の午後からは会員のなかの研究発表希望者が、日本、東洋、西洋などのそれぞれの専門分野について、日頃の研究成果を世に問う発表を行ない、それについて熱心な質疑応答が行われました。

12日午後には学会のクライマックスとも言うべきシンポジウムが開かれ、「16～18世紀絵画における大陸と日本」という題で、約100余人の出席者が4時間にわたって討議を行ないました。シンポジウムは京都市立芸術大学学長の佐和隆研氏の司会で行われ、日本については関西の美術史学会の長老源豊宗氏、中国については京都大学名誉教授長広敏雄氏、そして朝鮮については京都国立博物館館長松下隆章氏が、レポーターとしてそれぞれこの時期の絵画研究の問題点を指摘し、ついで司会者、レポーター、一般参会者相互の討論に

移りました。当館では折しもシンポジウムの題に関係の深い展覧会「朝鮮の絵画——日本にある高麗・李朝の作品」を開いていましたので、討議は陳列品を例にひいて活潑に行なわれ、大陸の絵画と日本のそれについて、今後の研究の指針となるような数々の成果をあげました。シンポジウムには、前号でご紹介した米国・カリフォルニア大学東洋美術史教授ジェームズ・ケイヒル博士も特別参加され、流暢な日本語で意見をのべられました。

学会第3日の13日は、午前には研究発表を行なったあと、午後には学会員に対し大和文華館所蔵の絵画20余点を特別公開しました。「松浦屏風」、「李迪筆 雪中帰牧図」など館蔵の代表的名品を眼近にして、沢山の会員はメモをとり、ルーペで細部を調べるなど熱心に見学、研究されていました。大和文華館としても、多数の専門学者から館蔵品についてのご意見をうかがい、今後の展観や陳列品の解説に大いに参考となるところがありました。

13日午後4時からは、学会の最後をかざって展示場下のピロティで会員の懇親会が開かれました。当日は天候にめぐまれ、空気がさわやかで、ピロティの周囲の芝生は青々と萌え、館周囲の蛙股池や松林も一きわ美しく見えました。それまでの研究討議や見学を終えた美術史学会の会員は、くつろいで当館庭園の美しい自然にふれ、あるいは芝生の上にすわってたがいに歓談をつくすなど、懇親会は夜になるまで続き、全国大会は成功のうちに終わりました。

美術史の専門研究者を全国から集めた大会の開催は、当館にとってまことに意義深いことであり、その成果は今後の当館の事業に反映してゆくことと思われます。

季刊 美のたより No.24

昭和48年6月1日

発行 大和文華館